

尾崎翠の両性具有への憧れ

——ウイリアム・シャープからの影響を中心に——

森 澤 夕 子

尾崎翠の作品に、昭和八年（一九三三年）十一月に鳥取の文芸雑誌「曠野」に発表された「神々に捧ぐる詩」という作品がある。この中で「私の神々」として「チャアライ・チャップリン」「マレーヌ・デイトリツヒ」などと並んで挙げられているのが、「キリアム・シャープ」である。

William Sharp（一八五六—一九〇五、以下、ウイリアム・シャープと表記）は、一九世紀末のスコットランドの詩人である。本名で小説や評伝を発表するとともに、Fiona Macleod（フィオナ・マクレオド）という女性名の筆名でも小説・詩などを発表していた。シャープはフィオナが架空の存在であることは伏せていたため、シャープの生前はフィオナの実在を疑うものはいなかったという^①。つまり、当時の人達にとつては、シャープとフィオナは全く別の人物としてとらえられていたのである。

「私の神々」の一人であるシャープについて、翠が最も興味を持っていたと思われる点が、彼の両性具有的な性質である。これは、シャープを題材とした翠の二つの作品が二つともこのテーマを扱っていることから推察される。翠のこうした性向については山田稔氏が、

彼女は、一人で男女両性を兼ねそなえ、その両性が愛し合う状態に憧れていたように思われる。おそらく、恋の欲求とその抑圧との葛藤のあげくに彼女が考えだした異性関係の理想、それが両性兼具だったのではあるまいか。^②

と言及しているが、まだ充分研究の余地があるだろう。ここでは、翠の両性具有的なものへの憧れについて、シャープからの影響を中心に考察したい。

まず、翠へのシャーブの影響を考察するにあたって、彼女はいつシャーブを知ったのかということを検証する。シャーブの名前が出てくる翠の作品は、昭和七年（一九三二年）七月の「こほろぎ嬢」、昭和八年（一九三三年）十一月の「神々に捧ぐる詩」の二つである。翠の文壇デビューを「新潮」に初めての小説「無風帯から」を発表した大正九年（一九二〇年）一月とすると、彼女の作家生活は実質十五年余りであり、これらのシャーブの名前が現れる作品は、その最晩年の作品である。

そもそも、シャーブは日本においてはどのくらい知名度があったのか。後述する薄田泣菫の随筆には、

ロゼチ、ハイ子、シエレエ、ブラウニングなどの評伝は今でこそそんなには言はれないもの、一頓り吾が国の文壇でも相当に読まれたもので、私達がこれらの詩人の生涯とその作物に対する評価は、大抵先づシヤアブの著作から入つたものだ。^③

とあり、現在でもロセッティの主要参考文献としてシャーブの著作が挙げられている。^④一方、創作の分野では、シャーブは注目されていたとは言いがたい。シャーブ名義、フィオナ名義それぞれに作品が残されているが、当時の日本でシャーブを訳しているのは、アイ

ルランド文学者の松村みね子一人である。シャーブはそれほど知名度の高かった作家ではなく、一部が注目するに過ぎない程度だったと言える。

翠がシャーブを知った経緯は、いくつか考えられる。まず、原書（英語）で読んだか、日本語で読んだかが問われる。英語のシャーブについての研究書は、シャーブ夫人の回顧録の [William Sharp (Fiona Macleod) A Memoir]^⑤（一九二二年）を始め何冊か出版されている。翠の鳥取高等女学校時代の得意科目は英語だったこと、昭和五年（一九三〇年）一月に「女人芸術」の「翻訳文学特集」でエドガア・アラン・ポオの短編「モレラ」の翻訳を発表していることから考えると、原書で読んだ可能性も捨てきれない。しかし、翠は日本女子大学では国文科に在籍しており、「年譜」^⑦からも他に英文学に興味を持っていた様子はいかがえない。シャーブを知った後で、彼について書かれた英語の書物を読んだことはあったかもしれないが、シャーブを知ったのは日本語の書物であった可能性のほうが高いと考えられる。

日本でのシャーブ研究の第一人者と言える松村みね子（一八七八—一九五八）は、本名を片山廣子といい、歌人としても活躍した人物である。生年は翠より十年ほど早いことになるが、翠と同じ時期に「女人芸術」の同人であった。大正十四年三月にみね子の訳した

『かなしき女王』（フィオナ・マクラウド名義、第一書房）は日本で初めてのシャーブの作品集である。また、彼女は「三田文学」や「心の花」にシャーブの作品の翻訳を発表している。⑧ こういったみね子の翻訳から、翠はシャーブについての知識を得たということも考えられる。しかし、みね子の翻訳はシャーブの作品を翻訳してあつても、伝記的事項には触れておらず、小説家としてのシャーブの紹介に力を入れている。一方、翠が作品の題材として扱ったのは、詩人・小説家としてのシャーブではなく、内面に男女両性を持つていたシャーブという人物である。みね子の作品からはシャーブの伝記的事項がわからないことから、翠がこの手段だけでシャーブを知つたのではないと推測できる。

では、シャーブのこうした側面を紹介した人物は他にいなかったのだろうか。大正十年一月の「心の花」に掲載されたみね子の翻訳のあとがきには「此頃ウイリアム・シャブのものは大分わが国に読まれてゐるやうに見えます」⑨とあり、大正九年十二月の「新潮」の木村毅の論文に言及している。これは、木村の「個人内に於ける両性の争闘」⑩という論文のことである。そこでは、「一男子の胸の中に女性の心と男性の心が相対立して争闘した例」としてシャーブのことがかなり詳しく書かれている。ここで重要なことに、「新潮」で文壇に登場した翠は、同じ「新潮」のこの号にも短編「松林」を

発表している。翠の文章が「新潮」に掲載されたのはこの時も含めて四度⑪だけであり、本格的に文学を志して間もない翠にとつて、商業雑誌に作品が掲載されることは大きな喜びであつただろう。したがつて、翠が「新潮」掲載の自作を改めて読み、さらに同じ号に掲載されていた木村の論文を読んだ可能性は高いと思われる。

また、木村はその論文の中で、薄田泣菫もシャーブについて書いていることを紹介している。これは、引用文の一致からみて、大正三年八月に刊行された『象牙の塔』所収の「内部両性の葛藤」という泣菫の随筆を指しているのだろう。泣菫もまたシャーブに深く興味を持つていたようで、『象牙の塔』の中で他にも「女性の芸術」という題名でシャーブについて書いている。木村の「個人内に於ける両性の争闘」と、泣菫の「内部両性の葛藤」は内容に共通する点が多く、⑫ 木村が泣菫の随筆をかなり参考にしたことをうかがわせる。翠が泣菫の随筆を読んだという決定的な根拠はないが、木村の論文を読み、シャーブに興味を持つて泣菫のものも読んだ可能性はある。シャーブを題材とした「こほろぎ嬢」の主人公こほろぎ嬢は翠自身をモデルにしたと思われる点が多い。⑬ こほろぎ嬢は彼の事をくわしく知ろうとして図書館に通うが、「幾日かの調べに拘らず、こほろぎ嬢のノオトはいつこう、豊富にはなら」ず、「神々に捧ぐる詩」にも「君にこがれ／文学史いくさつ／ほのかな君の影を追い、／ミ

ス・フィオナ／私はすこし疲れました」と書かれている。おそらくこれらは翠自身の行動とみてよいと考えられるが、翠は自分でもシャープの事を調べようとしたのだろうか。シャープの没年は一九〇五年であるが、一九〇二年や一九二二年としている書物もある^⑭。木村や泣菫は一九〇五年としているのに対し、翠は「神々に捧ぐる詩」でシャープの没年を一九〇二年としている。ここから翠がシャープについて書物を自分で調べ、典拠とした可能性は高いと考えられ、シャープについての関心の深さが見てとれる。

翠はその作家生活の中期から、すでに両性具有への憧れを思わせる作品を発表している。この時点では、まだシャープの影響は色濃くは現れていないが、翠がシャープを知っていたとは充分考えられる時期である。翠がシャープを知ったのが大正九年だとすると、翠は作家として活動したほとんどの時期、シャープの影響を受けていたのだと言える。

一一

翠がシャープの名前を初めて出すのが、昭和七年七月「火の鳥」に掲載された「こほろぎ嬢」である。この作品でシャープはどう説明されているのだろうか。こほろぎ嬢は「むかし、男女、いとかしこく思ひかはして、ことこほろなかりけり」という書き出しで始ま

る物語でしやあぶを知る。そこで説明されるのは、薄田泣菫や木村毅が書いているようなシャープの伝記とは少し違ったものである。

翠の作中作によるしやあぶの説明のうち、特徴的なのが彼が本気でまくろおどに恋をしているとしたところである。シャープ名のフィオナ宛の手紙と、フィオナ名のシャープ宛の手紙が存在したことは木村の論文にも紹介されているが、木村は「分裂し、対立し、争闘し、征服し合ふ内部の苦闘を鎮撫し、調停しようとする努力」であつたと見做している。しかし、「こほろぎ嬢」では

分心詩人ありあむ・しやあぶ氏の心が男のときはしやあぶのペンを取つてよき人まくろおどへの艶書をかき、詩人の心が一人の女となつたとき、まくろおどのペンを取つてよき人しやあぶへ艶書したのである。

と、シャープとフィオナがお互いに恋をしていることになっており、これは翠の創作であろう。ここから翠の「一人で男女両性を兼ねそなえ、その両性が愛し合う状態」への関心が見てとれる。

翠の描く恋愛は、「植物の恋愛」に譬えられる^⑮。それは代表作の「第七百界彷徨」（昭六・六）で人間の恋愛とともに藓の恋愛が描かれていること、またその恋愛があまりにもひそやかなものであることなどの理由によるが、その恋愛が自己完結していることも大きな理由となるだろう。植物の中には、イネやダイズなどの自家受粉で

種子をつくる種類もある。自分のなかのもう一つの人格に恋をするしやあぶは、このような植物を擬人化した人物のようである。

こほろぎ嬢は、しやあぶに思いをよせる人物として描かれている。自分で一つの人格を造りだし、その人格に恋をする男性は、恋愛対象としてはかなりユニークであると言えるだろう。こほろぎ嬢が翠自身を連想させることは先に触れたが、翠の恋愛観はどのようなものだったのだろうか。昭和五年二月の「女人芸術」の座談会での発言に、

（新居格、谷崎精二など男性陣に「現代の女性として、何にエロティシズムを感じるか」と聞かれ、——引用者注）

尾崎 現実の男性なんかつて者より、映画を通して感じます。

それを一つの幕に写した所で……（中略）

尾崎 役者は生きた男性だと云ふやうなことは、全然考へない。幕に写った男性だけ感じて、頭のなかでエロティックを感じることはありません。

谷崎 人間を離れてエロティックは無いでせう。帰納してみればやつぱり現実の男性を思わせる訳でせう。

尾崎 私にとつては別です。どこまでも幕に写つた……^①

というものがある。現実の男性よりも、映画の幕に写る対象にエロティシズムを感じるという翠は、手の届かないものに強い憧れを持

っているようである。現実の男性に対する一種の異性禁忌とさえ言えるかもしれない。

また、「こほろぎ嬢」の他の登場人物にも興味深い点がある。現実の人物として登場するのは、こほろぎ嬢のほかにはパン屋の女の子と、図書館で勉強していた先客の二人だけである。勉強していた先客のことを、こほろぎ嬢は「産婆学の暗記者」だと信じ込む。「黒っぽく、痩せた」「未亡人」のような彼女が、子供を産むのを助けるための産婆学を勉強しているらしいことは皮肉である。彼女への否定的なイメージは、翠の、成就した恋愛への嫌悪感を表しているとも考えられる。

しやあぶには、作中の人物であるということで「現実の男性ではない」という面と、「両性具有的な人物で、自分の中の人格に恋をしている」という面がある。そして、この二つの性質ともこほろぎ嬢の恋愛の成就を阻むものである。作中でも「これはなかなか迂遠な恋であつた」とあるが、こほろぎ嬢はより完璧な「成就しない恋愛」を求めていると言える。

二二

由里幸子氏は「女流作家の現在」の中で、現代の女流作家達の作品では生と性は切り離されていると述べ、こうした性質を他の性質

と合わせた上で「少女感覚」と名付けている。続いて「少女感覚」の先駆者として尾崎翠を挙げ、その理由として食物へのこだわりとともに、「こぼろぎ嬢」や「初恋」に見られる、両性具有への憧れ」を挙げる。また、加藤幸子氏も翠の作品の中では「性転換？がわりに容易に行われる」としている。

翠の小説「初恋」は昭和二年七月「隨筆」に発表された。内容を簡単に紹介すると、郷里の漁村Aを受験勉強のために訪れた「僕」は、ある夜盆踊りに参加する。そこで見かけた男装の女性に興味を覚え、踊りが続く中を帰っていく彼女を追いかける。しかし、彼女は実は彼の妹だった、という「三時間に満たない果敢ない恋」の話である。これだけだと単純な短編だが、ここに翠の両性具有への憧れが入ってくる。この盆踊りで、僕は「未婚者に取つて非常な面目」である借り物の女性の長襦袢を着ており、僕があとをつける女性性は「黒のアルパカに白ズボン」の男装である。女装の男性が、男装の女性に思いを寄せるという意味で、この作品は二重に倒錯したものとなっている。

盆踊りについては「あねさま被りで若返つた婆さん」や「海水帽子を手拭ひでしばりつけた学生」などが参加しており、思い思いの仮装をして集まるのだとわかる。しかし、この箇所から考えても、女性が男装をするという決まりがあるわけではない。つまり、「僕」

の妹は、本来ならどんな仮装をしても良いはずなのである。それが、他人の目をあざむくためとはいえ、わざわざ男装していることに意味があるとみてよいだろう。翠の文学には、「兄と妹」というテーマが繰り返し現れる。このテーマは初めての小説「無風帯から」（大九・一）から戯曲「アツプルバイの午後」（昭四・八）、「第七官界彷徨」（昭六・一六）などで見られるが、「初恋」も大きな意味を持つ作品だと考えられる。

「初恋」は翠が三十一歳のときの作品である。主人公の僕は十年前、受験生だったという記述があるが、翠の十年前は小学校の代用教員をやめた時期である。翌年の彼女の年譜には「東京での止宿先を定めかね、女子大進学を一年延ばした」とあり、この頃の彼女を受験生と見ることもできるだろう。また、この頃彼女が住んでいたのは、生まれ故郷に近い鳥取県の網代村という漁村であり、僕の避暑地の漁村Aに重なる。このように、「初恋」はある程度の設定を翠の体験したであろうことに頼っている。そして、まだ完成期の作品ではないが、性の超越というモチーフが素直に描かれている。もちろんここでの恋愛は打ち明けられず、実ることはない。また、兄から妹への感情が恋愛という形で現れること、同時に両性具有への憧れが出てくることにも注目したい。この時期から翠は両性具有への憧れを露わにしている。

ここで遡って、翠の作品の変化を、シャープとの関わりを中心に考えてみよう。翠の作品が活字になったのは、大正三年、翠が十八才のときに「文章世界」への投稿が採用されたのが最初である。その後二年ほど「文章世界」への投稿が続けた後、「新潮」で文壇に登場する。このときの作品「無風帯から」では、早くも兄と妹の恋がテーマとなっている。「文章世界」への投稿作品には、このテーマで書かれたものは全くないので、初めてまとまった長さのものを書いたことで、以後書きたいことがはっきりしたのでとも考えられる。「無風帯から」には、妹への愛に苦しむ兄の姿が描かれる。ここでは兄と妹が、実は血が繋がっていないなかったこと、また兄からの一方的な思いであり、妹には別に想う人があったことで、実の兄と妹が恋におちることは回避されている。

同じ年に「新潮」に「松林」が掲載され、おそらくこの時にシャープを初めて知ったと思われる。それから四年後、「初恋」が発表される。兄と妹は、それぞれ異性装をして、盆踊りの夜に出会う。ここでも自分の妹とは知らずに、兄は妹の仮装した姿に恋をする。「アップルバイの午後」では少し様子が違う。兄と妹は、喧嘩しながらも仲がよい。兄は妹に、恋をしてもつと女らしくなれと説教をする。結末で兄と妹の恋はそれぞれ成就するが二人の相手同士はまた兄妹である。つまり、二組の兄妹が相手を交換して恋愛している

のだ。二人の兄妹が四人になっているが、これも見方を変えたと兄と妹の恋である。さらにこんな箇所もある。

兄 村松ほど適任者はないよ。兄妹だけあつて横顔が雪子さんにそっくりなんだ。隣り合つて講義を聴いてると、講堂にゐることを忘れるよ。

妹 さうね。私だつて雪子さんと並んで講義を聴いてると、講

堂の気分ぢやない、かも知れないわ、未来のことだけれど。村松とは、妹が恋をしている男性であり、雪子とは兄が恋をしている、村松の妹である。村松と雪子が似ているので、兄は村松に雪子の面影を見、妹は雪子に村松の姿を重ねている。ここでも兄と妹の恋の他に、性の超越というモチーフが隠されている。

そして、「第七官界彷徨」、「歩行」（昭六・九）、「こほろぎ嬢」、「地下室アントンの一夜」（昭七・八）という一連の作品が発表される。「第七官界彷徨」には分裂心理病院で働いている小野一助という人物が登場するが、彼のノートにはこう書いてある。

互いに抗争する二つの心理が、同時に同一人の意識内に存在する状態を分裂心理といい、この二心理は常に抗争し、相敵視するものなり。

これは、木村毅の論文の中の「一男子の胸の中に女性の心と男性の心が相対立して争闘した例」といった言い回しとかなり似通ったも

のと言えるだろう。「第七官界彷徨」で主人公の小野町子と、従兄の佐田三五郎の間には恋愛めいた感情があるが、それも長続きはせず、その後兄と妹の恋というテーマは、作品中には現れなくなる。

絶筆に近い「神々に捧ぐる詩」で、再びシャープが題材として取り上げられる。この作品は題名通り、シャープへの思いを綴った詩であり、内容的には「こほろぎ嬢」とそれほど変わらない。あえて比較するなら、「こほろぎ嬢」が三人称の小説であり、こほろぎ嬢としやあぶの他に登場人物がいたのに対し、「神々に捧ぐる詩」は一人称の詩であり、語り手がしやあぶに寄せる思いが、よりはっきりと語られている。また、ここではより直接的にしやあぶの自分自身への恋愛が語られる。そして、しやあぶを文学史の書物から探す「私」は、現実世界の住人として完全に彼とは隔てられている。

先に引用した「女人芸術」の座談会の似顔絵で、翠は「新しい女」の象徴である断髪に意思の強そうな口元で、男性たちよりも力強いタッチで描かれている。^{②1}「女人芸術」主宰の長谷川時雨は、今までの女と云ふ者は、食べたい物でも欲しい物でも、決して云ひませんでした。どんなに食べたたくつても、お辞儀をしてゐて食べやうと云ふやうな人が無かつた。^{②2}

が、今の人はそんな所がなく、気持ちが明るく朗らかだと女性の意識の変化を指摘している。「生きた男性」より「幕に写った男性」

を良しとする恋愛観を持つ翠は、男性に全てを委ねないという意味で、「新しい女」であると言えるかもしれない。しかしその姿勢は、積極的に他者と関わっていかうとするものではない。

シャープに強い影響を受けた翠は、成就しない恋愛を描いた作品を多く発表した。それは、ユーモラスでありながら、どこか物悲しさのある彼女の作品の魅力になったが、一方でその恋愛があくまでも通常の男女関係においては成就しないという点で、作品がパターン化している印象を与えることも事実である。シャープからの影響は、翠の恋愛についての基本的な性向をさらに強めるものであり、全く別の方向へ導くものではなかったのである。

ウィリアム・シャープは、現在の文学史の中ではほとんど重要視されない詩人である。彼が女性名の筆名を用いたということも、それほど注目されていない。しかし、このことに強い興味を抱き、彼の生涯を調べてみようとした人々がいた。それが「内部両性の葛藤 井リヤム・シャープの性格にあつた男女両性」を発表した薄田泣菫であり、「個人内に於ける両性の争闘」を発表した木村毅である。そして、「こほろぎ嬢」「神々に捧ぐる詩」を書いた尾崎翠もその中に入れることができる。

彼女は木村の論文によってシャープの存在を知り、シャープを題材とした作品を執筆したのだと推測できる。その作品に描写されるように、翠もシャープを知ろうとして図書館に通ったのだろう。だが、シャープについての十分な資料は得られなかったことが、作品からはうかがえる。しかし、逆に翠は自分で自由なシャープ像を作り上げることができた。ここでは、木村が「自分も又ある時はファイオナの心となつてシャープへ宛てた手紙を書き、ある時はシャープの心となつてファイオナに宛てた手紙を書いた」と紹介した事実が、一つの体を共有するしやあぶとふいおなの恋物語になり、二つの作品の題材となった。自分の中のもう一つの人格と愛し合うしやあぶに恋をすることはろぎ嬢の姿は、現実の存在よりも映画の中の存在にエロティシズムを感じるという翠の姿と重なり合う。

現代の女性作家の作品においては、性差を自在に乗り越える意識が強くなり、両性具有的な感覚の作品が増えているという^③。その傾向は、自らの内部で完結した人間関係を求めるというマイナス面と、新しい人間関係を模索するというプラス面の両方ととらえられている^④。今から半世紀以上前の作家の尾崎翠の作品でも、両性具有への憧れが見られる。翠の場合はどちらかと言えば自己完結した恋愛への指向を思わせるが、現代の傾向を先取りしたようなその作品は、もつと評価されても良いだろう。

注

- ① 吉江喬松編『世界文芸大辞典 第三卷』ウイリアム・シャープの項、六二二頁（昭11・8・17、中央公論社）では「シャープとマックラウドと同一人なることは死後に知られた」とある。
- ② 山田稔「静寂の力——尾崎翠を読む」（尾崎翠『第七官界彷徨』所収、二五四頁、昭55・12・15、創樹社）
- ③ 薄田泣菫「象牙の塔」（大3・8、春陽堂）『薄田泣菫全集』所収、三九〇頁、昭59・6・1、創元社）
- ④ 下中弘「ロセッティ——ラファエル前派を超えて」三六八頁、三七八頁、（平5・12・6、平凡社）などに見られる。
- ⑤ 青山富士夫『20世紀イギリス文学作家総覧 Ⅲ詩』二二六頁―二七頁、（昭56・1・20、北星堂書店）による。
- ⑥ 稲垣真美、日出山陽子編『尾崎翠年譜』『尾崎翠全集』五〇〇頁、（平4・6・25、創樹社）
- ⑦ 注⑥に同じ。
- ⑧ 「伝説より——ウイリアム・シャープ——」（『三田文学』8―12、八〇頁―九五頁、大6・12）、「二年の夢」（『心の花』25―1、二八頁―三五頁、大10・1）など。
- ⑨ ウイリアム・シャープ作、松村みね子訳「二年の夢」（『心の花』25―1、三五頁、大10・1）
- ⑩ 木村毅「個人内に於ける両性の争闘」（『新潮』33―6、四九頁、大9・12・1）
- ⑪ 「素木しづ子氏に就いて」（『新潮』25―4、大5・10）、「夏逝くころ」（『新潮』25―6、大5・12）、「無風帯から」（『新潮』32―1、大9・1）、「松林」（『新潮』33―6、大9・12）の四度である。
- ⑫ 木村は、泣菫の名前を明記して、その文章を三箇所引用している。

⑬ こほろぎ嬢は「二階の借部屋」に住む「一種の粉葉の常用者」で、菓のせいで「人ごみを厭」っているとあり、これらの点が翠の人物像と重なる。

⑭ George Sampson [The Concise Cambridge History of English Literature] 七四〇頁（昭28、Cambridge at the UNIV+PRESS）で、一九〇一年、Dr James Kennedy 他編 [Dictionary of Anonymous and Pseudonymous English Literature] 二四六頁（昭6、OLIVER AND BOYD）では一九二一年とされている。

⑮ 注⑩に同じ、五五頁。

⑯ 川崎賢子「少女^々的世界のなりたち——尾崎翠の彷徨」（『幻想文学』24、九八頁、昭63・10・25）などにみられる。

⑰ 「炉辺雑話」（『女人芸術』3—2、一八頁、昭5・2・1）

⑱ 由里幸子「女流作家の現在」（長谷川泉編『女性作家の新流』所収、七一頁、平3・5・10、至文堂）

⑲ 加藤幸子『尾崎翠の感覚世界』三三頁、（平2・7・15、創樹社）

⑳ 注⑥に同じ、五〇二頁。

㉑ 狩野啓子氏は、「感覚の対位法——尾崎翠『第七官界彷徨』」（岩淵宏子他編『フェミニズム批評への招待——近代女性文学を読む』所収、二四九頁、平7・5・20、學藝書林）の中で、「男に似た女」という認識が、「恋愛」の抑制、アンドロジナスやドッベルゲンガーへの強い傾倒に向かうことは、「容易に想像される」としている。

㉒ 注⑰に同じ、九頁。

㉓ 例として、富岡多恵子、吉本ばなな、長野まゆみなどの作品があげられる。

㉔ 注⑱に同じ、七八頁。

〔付記〕 本稿で引用した尾崎翠の文章は、『尾崎翠全集』（平4・6・25、創樹社）によった。なお、引用に際し、漢字は原則として新字体に改めた。